

随筆



“フィレンチェで考え そのごのこ” (二)

三原内科クリニック
喜久村 徳清

☆

小説「日蝕」(参考1)は学士論文を書き終えたばかりの巴黎大学の神学徒が、1482年初夏、書状をたずさえルネッサンスの嵐が吹きすさぶ中世^{フィレンチェ} 稜^{パリの}の街へと重力^{アルプス} 伯^{ヒト}を越えて孤^{カチ}り徒にて旅立つことから始る。天使のような無垢の少年ジャン、異端の聖ドミニコ派僧侶、人里離れた洞窟で求道者の雰^{タダヨ}囲気漂う老錬金術師ピエエルの業、賢者の石、クライマックスの日蝕の日に登場する両性^{ケンジヤ} 具有者、異端審判、魔女狩り、^{アンドロギュヌス} 焚^{アンケイ}刑^{シヨ}の処、難解な文体を読み終えた感動は、主人公が研究室に戻って蒼空を見上げ回想する場面の描写にも共鳴して、私の旅の契機^{ソラ}の一つにもなり、本誌表紙写真の高揚した説明(参考2)ともなった。(写真1)。

ガリレオの業跡の新発見が今世紀に入ってもなされている(参考3)。古代の占星術はガリレオの科学的発見により神話の領域へと追いやられてしまっているが、我々は己^{おのれ}の脳で理解しうることしか理解できない。ニュートンの科学的思考は“引力は重力に比例し距離の二乗に反比例して減弱す



写真1

フィレンチェ市街のズームアップ写真。
小高い丘に囲まれ、ミケランジェロ広場より写す。

る”と表現されなければ万有引力の法則の発見の説明とはならないという。「リンゴが木から落ちる」比喻は文学的、あまりにも文系的過ぎた表現であって科学の専門家にとっては理解し難いことであり、これは“現代の神話”、伝説にも等しいという。

☆☆

科学技術が進み興味ある専門分野の情報が豊富にわかり易く、至極たやすく手に入る様になってきた。私は今の時代に在って宇宙の始まり、生命の誕生から宇宙の死に至るまでを識ることができる。伝えられるところによると地球からみる宇宙の渚には毎日3万トン、小さいもので径0.4cmのすい星(流れ星)が辿り着き、これは0.01mm³の粉末が地球の1m²の表面に毎日1個の割でシャワーのように降り注いでいる計算となり、さらにすい星には生命に欠かせない(原始地球にはなかった)必須アミノ酸グリシンが含まれているという(小惑星「イトカワ」から日本初の宇宙探査衛星はやぶさが持ち帰った微粒子1,500個の分析から初めて解った)。

大昔、数千年～数万年来、昔人が暗黒の闇夜で天空を仰ぎ見、そして満天の星と流星群に感動し、星に夢を託して祈った行動は、昔人が脳内で直感的に感じた真実(真理)であって、私達人類や生命の起源が宇宙のかなたよりもたらされたとするこの現代の専門家群の実証は、^{しよせん} 所詮、昔人と現代人との認識は(が)本質的には変わりのないことを示していることで、その事実を知ることが感無量なコト極マリナイ。

☆☆☆

1940年製作、ピノキオ童話のアニメ映画のその主題歌は「星にねがいを」。斯して、「星の王子さま」、「鉄腕アトム」、宮沢賢二の「銀河鉄道の夜」の世界がみえてくる。しんわはひとにかんめいをあたえている。ますますしんわには行っていきたい。いけない。

人生をいきなくては。人生にかしがある。



写真2
教会内部の構造。奥が腰掛のある礼拝堂。



写真3
サンタ・クローチェ教会内に在る
ガリレオ・ガリレイの眠る墓所

サンタクローチェ教会の広場は前日、団体旅行の解散場所となった所だが足をのぼし、内部から写真を撮った(写真2)。両側壁面を背にして墓所やモニュメント、肖像画があり、礼拝堂の造りは奥にみえる。

サンタ・クローチェ教会内のミケランジェロ、ガリレオ、ロッシーニ、マキャベリの墓、ダンテのモニュメント等、イタリア人偉人の眠る墓所をみていると、日本のお寺参りと似ていると思ったが、とりわけガリレオの墓所前に献灯ロソク(蠟燭)が多かった(写真3)。

メモトモリ(らてんご)。キリスト教社会は死後の復活を渴望して天国への道をリアルに、ディーブオンに信じる。死を畏れない。

旅を終え歩かぬ日々の続いた後、両足底部の拇指のつけ根から薬指にかけて水泡ができた。歩き続ければ足まめになったであろうが、痛みで歩くのもやっとであった。而して思ふ。

あるこう。あるこう。まえへすすもう。

☆☆☆☆

免疫学基礎研究者が2千年以上も前に書かれた「黄帝内経」の中の衛気と營気は、現代免疫学の「自然免疫」と「獲得免疫」に該当する(参考4)という。解明可能な分析技術を豊富にもっている現代人の新たな研究課題ともいう。解決されれば昔人、神話の時代の先人の正当な評価が可能となる。神話の世界の時代でキリストが生まれ、古典復興、ルネッサンス、コロンブスは1492年大陸を発見、自然科学の芽ばえ、そして今世紀に入って科学の世紀を謳歌している。インターネット、EBM、ゲノム研究、遺伝子診断、ロボット手術ダヴィンチ、ips細胞、ビッグデータとオピニオンリーダー、iPad、そして「紙の書籍を自炊する」(参考5)ことも可能な時代になってきた。わかりやすく簡明にその解説をしてくれる。

現代の神話を聞いている。あくなくしんわをきける事はさいわいなことである。

(9月30日記)

参考1

平野啓一郎「日蝕」新潮1998年8月号
(第120回芥川賞受賞)

参考2

フィレンチェ・ドゥオーモ(Duomo)
沖縄医報平成24年11月号表紙の言葉

参考3

ガリレオ自筆の絵発見「星界の報告」特別な一冊
沖縄タイムス2007年3月29日

参考4

高橋秀実 免疫と漢方：黄帝内経に啓示された古代人の智慧 日東医誌64(1)1-9、2013年

参考5

篠原直哉 ITを使いこなす? 第7回沖縄県女性医師フォーラム 県医師会館3Fホール 2013年7月20日

随筆



人生の師との出会い

伊江村立診療所所長
阿部 好弘

誰にも若いときの苦い思い出や青春の甘酸っぱい経験があると思いますが、私の20代の頃の思い出と言えば、医学部生として勉学に励んだ事よりも、空手道の師匠（人生の師）に出会えた事が大きいと言えます。

私は、中学校まで顔は青白く体のほっそりした、いわばモヤシっ子でした。高校生になってバレー部に入りますが、強さへの憧れから空手に興味を持ち、通信教育の空手を始めました。友達に撮ってもらった写真を送って添削してもらおうのですが、これで本当に強くなれるのかと途中で気付き、長くは続きませんでした。

大学では剣道部に所属しますが、医学部2年のときに、医師になる目標を完全に見失い、周囲に流されている自分を感じ、半年間休学しました。この世の中で何が真実なのか、僕の心のよりどころは何なのか？大学の図書館で哲学や宗教の本を読みあさり、教会にも通う日が続きました。しかし、求めるものは得られず、自暴自棄になっていたときに出会ったのが、剛柔流空手道でした。電信柱の張り紙をみて道場を訪ね、そこで館長の境龍剛先生（師匠）に出会いました。後日、館長先生は、「あの時のお前の目は、腐った魚の目をしていただ」と話してくれました。

道場入門した私は大学の剣道も続けながら空手道場に通い、3年間で黒帯を取ると、大人や子供の指導もまかされるようになりました。大学の試験中も道場を休む事は許されず、そのおかげで2年間留年してしまいました。剣道部ではキャプテンも務め、剣道部引退後は空手のみに専念し、医学部で剛柔流空手道研究会を発足し仲間を作りました。医学部5年生の時は、手

刀でビール瓶切りができるようになっていました。手刀の稽古で右手がパンパンに腫れると、氷水の入った洗面器に手を入れて冷やすのですが、将来医師になるのにそんなに手を痛めつけて大丈夫なのか、と同級生に心配されたものです。

道場では少年の部、一般の部の指導があり、学生時代は、私にとって夏休み、冬休みはありませんでした。試験前にも道場での指導は一度も欠かしたことはありませんでした。夕方5時に授業が終わると、同級生たちが次の日の試験対策に専念するのを横目に、私一人道場に向かっていました。6時には子ども達が道場にやってきます。一人で床を磨き、神棚の榊（さかき）を交換し、気持ちを集中する為に神棚の前で黙想をします。好きで始めた空手でしたが、さすがに医学部の試験中はつらく、「どうしてここまでしないといけないのか」と、思わず涙が出てくる日もありました。

厳しい稽古の間にも、ときには楽しい事もありました。お師匠さんが空手の指導で県外に出かけるときには、いつも学生で自由に時間が取れる私がお師匠さんの鞆持ち？ボディガード？ならぬ「付き人」でした。道場の先輩はいつも言っていました。「阿部君はいいな。館長先生にいろいろ教わる事ができて」と。でも直接教わる事はなく、そのかわりお師匠さんの稽古法をじかに見る事ができました。その動きはとても柔らかく中心がぶれず円の動きでした。

この空手道を続けたおかげで、身体も強靭になりましたが、それ以上に医学部を卒業後に救急医療を自分の専門として選択することができました。私にとって、人生の大切な事を教えてくれたのは、大学の教授ではありませんでした。館長先生は稽古が終わるといつも、「よしひろ、聴診器で診る医者になるな。心で診る医者になれ！」と、教えてくれました。今は、その意味がよくわかります。師弟の関係は僕が医師になってからも続き、常に私を温かく叱っていただき、数年前に館長先生の最後を看取りました。

伊江島に赴任してから、これまで3回にわたり、型の演武をする機会がありました。沖縄角

力（すもう）の大会と、上地流の空手道大会です。今年の10月には、伊江島で主催された沖縄民謡公演で空手の演武をしました。演武をさせていただいた感謝と、いつまでも修行が続いているのだという厳しさを感じています。私が空手道を修行して来た事と、今こうして伊江島で離島医療に身を捧げているのは、何かがつながっているのかと思います。

医師としてその仕事を全うするために知識と

技術を磨くのは当然ですが、一人の人間として自分がしっかり生きていなければ、それを生かす事はできません。仕事をしながらもっと楽(らく)したいなあ、休みたいなあ、と思う時もあります。しかし、空手道の修行で得たものは、人の痛みを知る事と人生の厳しさでした。そして人生の師と出会えた喜びでした。今も自分の未熟さに気付く事がたびたびあり、生きている限り修行が続くのを感じます。



境龍剛館長先生（左）